令和３年度

第１５回石川県高等学校体育連盟研究大会

研　究　紀　要

主催　　石　川　県　高　等　学　校　体　育　連　盟

令和３年度　第１５回石川県高等学校体育連盟研究大会開催要項

１　目　　的　　石川県高等学校体育連盟に加盟する各高等学校の体育･スポーツ指導者の資質向上を図るため、日頃の研究成果を発表するとともに、当面する諸問題について情報を交換し、高等学校教育の一環としての体育・スポーツの振興・発展に資する。

２　主　　催　　石川県高等学校体育連盟

３　日　　時　　令和３年１１月３０日（火）　１３：４５～１６：００

４　会　　場　　石川県青少年総合研修センター
金沢市常盤町２１２－１　　ＴＥＬ 076-252-0666

５　参加対象　　石川県高等学校体育連盟加盟校の体育・スポーツ指導者

６　研究主題　　「創ろう！ワールドワイドな運動部活動」

７　内　　容　　研究発表

発表テーマ「部活動の活性化について」

①「合同練習会の開催」～部活動の充実に向けて～
発表者：卓球専門部
石川県立金沢桜丘高等学校　　松田　良平 教諭

発表テーマ「健康と安全について」

②「コロナ禍における安心・安全な環境つくり」
～with コロナ時代の新しい取り組み～
発表者：ソフトテニス専門部
石川県立金沢錦丘高等学校　　新平智恵子 教諭

発表テーマ「競技力向上について」

③「バレーボール競技における競技力向上の取り組み」
～U-16 大会を開催して競技力を高める～
発表者：バレーボール専門部
石川県立金沢商業高等学校　　小坂　慎吾 教諭

発表テーマ「競技力向上について」

④「部活動における中学・高校の連携」
～中高連携した部活動における競技力向上～
発表者：相撲専門部
金沢学院大学附属高等学校　　徳田　哲雄 教諭

８　日　　程

13:15	13:45~	14:00~	15:30~	15:45~
受付	開会式	研究発表 質疑応答	指導助言	閉会式

「合同練習会の開催」
～部活動の充実に向けて～

卓球専門部
石川県立金沢桜丘高校　松田良平

１．石川県高体連卓球専門部の現状と課題

石川県の高校卓球は令和３年度全国高等学校総合体育大会において遊学館高校が男女ともに団体ベスト８に入るなど、近年は全国大会で好成績を収めており、他県と比べても競技力の高い選手が多い。日々部活動に熱心に取り組んでいる選手や指導者の努力の賜物である。一方で、県全体で見ると「県上位と中下位の競技力の差が広がりつつある」、「中学校まで卓球をやっていた選手が高校では卓球部に入らない」といった問題点がある。これらの問題を解決するためには、指導者のいる私立の強豪校だけでなく、すべての学校で充実した部活動ができる環境を整えることが重要である。実際に公立高校で懸命に活動している選手にアンケートをとると、「練習の質をもっと上げたい」や「今の練習で強くなれているか分からない」という声が多数あった。特に女子選手は部員数の減少が著しく、効果的な練習ができていない部活動が多いようである。

私は中学校、高校と６年間長野県で卓球をしていた。長野県では高体連主催で地区ごとの合宿を実施しており、強豪校に所属していなかった私にも外部指導者の方の指導を受ける機会があった。そのような練習会は、高校時代の私にとっては強くなるために必要なものだと感じていた。石川県では５月に石川県高等学校総合体育大会に向けたダブルスの交流会はあるが、石川県全体の強化のための練習会は実施できていないのが現状である。

これらのことから、今回は小規模ではあるが、各学校の部活動を充実させるという趣旨の下、複数校合同で練習会を実施した。また、今後よりよい練習会にするために選手たちにアンケートに協力してもらった。その練習会の内容と今後の課題について紹介する。

	男子			女子		
	全国総体 団体成績	総体県予選 団体出場数	総体県予選 シングルス出場数	全国総体 団体成績	総体県予選 団体出場数	総体県予選 シングルス出場数
H28	ベスト４	４２校	５８２名	ベスト３２	３０校	２７４名
H29	準優勝	４２校	６１２名	ベスト４	３０校	２４８名
H30	ベスト４	４２校	６２６名	準優勝	２７校	２２８名
H31(R1)	ベスト４	４１校	５９６名	準優勝	２５校	２１０名
R3	ベスト８	４１校	５４２名	ベスト８	２５校	２０２名

図１．直近５大会の全国大会の成績と県予選の出場数

２．部活動の充実に向けた取り組み

(１)外部指導者を招いた練習会

公立高校に所属する県上位選手に話をきくと、「強くなるための練習方法が分からない」や「自分より強い選手がいないため、質の高い練習ができていない」といった意見があった。そのため、外部指導者を招いて、公立高校の県上位選手に対する練習会を行った。外部指導者の方には今回の練習会の趣旨を伝えて、主に技術指導と各学校で実践できる練習メニューの紹介をしていただいた。多球練習など、実力差がある中でも取り組みやすい

図２．外部指導者の方の講義

練習方法や校内のトップ選手としての心構えを教えていただいた。各学校の普段の部活動で実践しやすい内容であったので、今回練習会に参加した選手が、自校の部活動をよりよいものにしていくことと期待している。練習会終了後のアンケートを見ると、概ね満足したようで、参加した全員が次回も参加したいと回答した。「大学生のように強い人と練習がしたい」という要望があったので、次回の練習会の内容を検討したい。今後も月１回程度を目途に実施していく予定である。

図３．多球練習に取り組む様子

（２）部員が少ない学校に向けた練習会

卓球はラバーの種類や出すサーブの種類など、戦型が多種多様であり、普段の練習でいろいろな戦型の人と練習することは試合で勝つために必要である。しかし部員の少ない学校では、「カットマンに勝てない」や「試合になると相手のサーブが取れない」など、練習で十分な対策がとれず、試合で勝つことができない選手が多い。事前のアンケートでは、「異質ラバーの選手と練習がしたい」や「日頃の練習がマンネリ化してしまう」という意見があった。また、部員が少ないと対外試合を組むことが難しいことから、練習してきたことを試す場が少なくなり、普段の練習に対するモチベーションの維持が難しくなる。今回はこれらの悩みを持つ女子部員数が少ない学校を４校集めて合同練習会を行った。練習会は前半に合同練習、後半に練習試合と多球練習という内容で実施した。

図４．４校合同練習会の様子

前半の合同練習はホスト校の普段の練習に沿って、なるべく他校の選手とペアを組んで行った。他校の選手は、普段やらない練習で慣れない様子であったが、自分の課題を発見し、自校の練習を見つめ直す良い機会になった。各学校の先生方にお願いして、他校の選手にもアドバイスをしていただいたことで、いろいろな視点からアドバイスがいただけたことも良かった。後半の練習試合では、自校にはいない戦型の選手に対して、積極的に試合を申し込む様子が見られ、とても有意義なものとなった。練習会終了後のアンケートを見ると、「練習会を通して他校の選手と仲良くなれた」や「技術向上につながるので次回も参加したい」という前向きな意見が多くあった。選手の技術向上や練習に対するモチベーションの向上につながる良い練習会になったと考えられる。今後も月１回程度を目途に実施していく予定である。

３．今後について

今回の練習会やその後のアンケートから、選手たちの卓球に対する熱意と向上心を感じることができた。石川県高体連卓球専門部として、そうした選手たちの思いに応えていきたい。

現状、石川県内の卓球部の顧問の先生の中で、専門的な指導ができる先生は少数である。そうした状況を踏まえると、今後は今回の取り組みの規模を大きくして、外部指導者から指導を受けたい学校や対外試合が組めなくて困っている学校などが希望すれば気軽に参加できる仕組みを考えていく必要がある。それが実現すれば、石川県内どの学校に進学しても、充実した部活動ができるようになる。この理想を目指して取り組みを進めていきたい。充実した部活動ができる学校を増やすことは、卓球の裾野を広げることにつながる。こうした取り組みで卓球人口を増やし、競技レベルを上げて、石川県の卓球界を盛り上げられるよう努めていきたい。

コロナ禍における安心・安全な環境つくり
～with コロナ時代の新しい取り組み～

ソフトテニス専門部
石川県立金沢錦丘高等学校　新平　智恵子

１　はじめに

（１）　ソフトテニス競技とは

ソフトテニス競技は、1884 年以来 130 年の歴史のある日本発祥のスポーツである。ソフトテニスは、ネットを挟んで相手と向かい合い、ラケットを使ってゴム製のボールを打ち合い、ポイントを競うスポーツである。自分のコートに飛んできたボールをノーバウンド(コートに一度もつかない状態)か、ワンバウンド(コートに一度だけついた状態)で返球する。試合にはダブルスとシングルスがあり、対戦方法としては個人戦と団体戦がある。 試合は、7 ゲームマッチ(4 ゲーム先取)で、１ゲーム 4 ポイントで行われる。ただし、ファイナルゲーム（3-3）だけは 7 ポイント先取で行う。試合時間は 1 試合 30 分程である。

日本ソフトテニス連盟一部抜粋

（２）　安全対策・傷害の予防

ネットを挟んでプレーするため身体の接触は少なく、ボールはゴム製であるため、大きな事故はこれまでに報告されていない。ソフトテニスによく見られるスポーツ障害は、多くがオーバーユースによるものである。他にラケット、打球が当たること、選手同士の衝突、施設の整備不良が原因となる転倒などによる打撲や足関節捻挫、骨折がある。それらの予防には、環境の整備、コートコンディション、メディカルチェックが重要である。ソフトテニス競技は春から秋にかけては屋外で、冬から春にかけては屋内で行われており、1 年中行うことが出来る。1 年を通してみると屋外での練習や大会の方が多く、天候には十分注意する必要がある。特に夏の炎天下での活動では、熱中症や過換気症候群を引き起こすこともあるので、十分の水分補給としばしば休息をとることに留意することが必要である。また、近年の大会はオムニコートを使用するようになり、下半身への負荷が増していると言われている。

（３）　石川県の高校の部員数

全体的に部員数は減ってきているが、昨年度までは 1 年生は前年度程度もしくはそれ以上の部員数を確保し徐々に増加傾向にあった。中学から継続して部活動に入る生徒が少ないという課題改善のため中学への出張練習会や交流会などを継続してきた成果であると考え今後に期待していたが、令和 3 年度に関しては大幅に減少した。また、令和元年の 1 年男子の部員が 232 人から 2 年生では 191 人 3 年生では 171 人と急激に減少していることも特筆され、その背景としてコロナ感染拡大やそのことによる大会中止、練習が制限されたなどが少なからず影響しているのではないかと考える。

男子	R1			R2			R3		
学年	3年	2年	1年	3年	2年	1年	3年	2年	1年
人数	170	219	232	185	191	238	171	207	177
合計	621			614			555		
比較				−7			−59		

女子	R1			R2			R3		
学年	3年	2年	1年	3年	2年	1年	3年	2年	1年
人数	127	133	144	114	132	143	124	136	113
合計	404			389			373		
比較				−15			−16		

２　コロナ禍における部員の変化と対策　　2

専門委員が所属する学校にコロナ休校期間前後での生徒たちの変化や健康･安全に向けての対策などについてアンケートを実施した。質問項目は(1)コロナ休校再開以降の生徒の変化について、(2)休校期間中に健康・安全のために行った対策、(3)再開した際に健康・安全に行うために気をつけたことである。

【アンケート結果】

(1)コロナ休校再開以降の生徒の変化

◎生徒の怪我、病気について

・時間をかけながら生徒の状況に応じて実施したことで、大きな怪我につながったケースはなかった。

・ソフトテニス競技で怪我の多い足や腰、肩等を痛めた生徒も中にはいた。

・**手洗いうがいなど感染対策を徹底したことで、体調不良の人が減った。**

◎体力面について

・運動量の減少により、**体力、筋力、瞬発力の低下、体重の増加**が見られた。

・女子生徒の持久力の低下が目立った。

◎精神面について

・練習できる喜びとコロナ感染の不安との葛藤がみられる。

・**忍耐力やモチベーションが低下した。**

・なかなか経験が積めないことから、**自信が持てない**部員もいる。

・**３年生と一緒に活動する時間が少なかったので、チームとしての成長、練習に取り組む姿勢等を学ぶ機会がなく、練習態度や人間関係が幼くなった。**

◎技術面について

・指導機会が減り、例年に比べ技術向上に時間がかかった。

・**精度の高いプレーが見られなくなった。**

◎その他

・遠征や合宿などが出来ないことで、集団行動などの経験が少なく、色々な学びが出来なくなっている。

・**スマホ依存が増え**、学習習慣、生活習慣が乱れていた。

(2)休校期間中に健康・安全のために行った対策

◎自主的にトレーニングを行えるような工夫

・ユーチューブ等を活用し、チーム全体用と個々に必要なトレーニング動画を紹介した。

・クラスルームでトレーニングなどチェックシートを用いて継続を促した。

・Teams でストレッチや筋トレ、コーディネーションなどの練習メニューを記したファイルを見れるようにした。

・定期的にリモートトレーニングをおこなった。

◎規則正しい生活指導（保護者とも連携）

・テニスノートを活用し、毎日記入させた（今日行ったことや気持ちなど）

・チェックシートの作成

◎休校期間中の部員とのつながり

・Teams を使用し、新入生歓迎ミーティングをオンラインで実施した。

・定期的に連絡をとり、コミュニケーションを図った。

◎選手のモチベーション、体力維持のために

・生徒への課題を作成し郵送した

内容：日誌、毎日ノルマシート、メンタルトレーニング（自己啓発）など

名前（　　）

毎日のノルマ　チェックシート

○できた　△少しはできた　×できなかった

4月	曜日	AM7時起床	午前学習	PM11時就寝	午後学習	体幹	スクワット	腹筋・腕立て	プラスα
9日	木								
10日	金								
11日	土								
12日	日								
13日	月								
14日	火								
15日	水								
16日	木								
17日	金								
18日	土								
19日	日								

目標達成用紙テンプレート

名前（　大谷　翔平　）

① 中央の二重線枠に自分の目標を書く。

②その為に必要な事を目標の周りに8項目書く。

③8項目に必要なことを8項目書く。

体のケア	サプリメントを飲む	FSQ 90Kg	インステップ改善	体幹強化	軸をぶらさない	角度をつける	上からボールをたたく	リストの強化
柔軟性	体づくり	RSQ 130Kg	リリースポイントの安定	コントロール	不安定をなくす	力まない	キレ	下半身主導
スタミナ	可動域	食事 夜7杯 朝3杯	下半身の強化	体を開かない	メンタルコントロールをする	ボールを前でリリース	回転数アップ	可動域
はっきりとした目標や目	一喜一憂	頭は冷静に	体づくり	コント	キレ	軸でまっすぐ	下半身の	体重増加

(3)再開した際に健康・安全に行うために気をつけたこと

・コロナ感染がないように感染予防対策の徹底を図った。

・体力低下がうかがわれたので、特に熱中症などにならないように休憩時間の取り方など工夫した。

・準備体操やコーディネーションのひとつひとつの意味を確認しじっくり行った。（再確認）

・一人ひとつのゴムバンドを配り、自主トレーニング用とした。

・徐々に負荷をかけるような練習の工夫を行った。（活動時間、内容、強度など）

・体力、技術的にも個人差があったので、個別メニューから始めた。

（全員で統一したメニューができるまでに時間がかかった）

3　コロナ禍における安心・安全な対策（インターハイ）

（1）　インターハイの日程

＜男子＞日程：7 月 29 日　団体戦　　7 月 30 日、31 日　個人戦

会場：能都健民テニスコート

＜女子＞日程：8 月 2 日　　団体戦　8 月 3 日、4 日　　個人戦

会場：和倉温泉運動公園テニスコート

（2）　平成 30 年から令和 3 年のインターハイ時の傷病者一覧

県名	開催年度	開催市町	外科的疾患													
			擦過傷・切り傷		打撲・ねんざ		筋肉痛・肉離れ		関節痛		骨折		脱臼		その他	
				搬送数		搬送数		搬送数		搬送数		搬送数		搬送数		搬送数
	平成３０年	鈴鹿市	1		1	1									2	
	令和元年度	宮崎市	3		2										8	
	令和３年度	能登町・七尾市	1												2	
合　　計			5	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	12	0
割合（%）			6.8%	0.0%	4.1%	11.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	16.4%	0.0%

県名	開催年度	開催市町	内科的疾患														合　計	
			熱中症		頭痛		はきけ・嘔吐		腹痛・下痢		発熱・かぜ		めまい		その他			
				搬送数		搬送数		搬送数		搬送数		搬送数		搬送数		搬送数		搬送数
	平成３０年	鈴鹿市	15	3	1		1		1	1	1		3		2		28	5
	令和元年度	宮崎市	16	4			3		3						3		38	4
	令和３年度	能登町・七尾市			1				2		1						7	0
合　　計			31	7	2	0	4	0	6	1	2	0	3	0	5	0	73	9
割合（%）			42.5%	77.8%	2.7%	0.0%	5.5%	0.0%	8.2%	11.1%	2.7%	0.0%	4.1%	0.0%	6.8%	0.0%	100.0%	100.0%

（３） 熱中症対策

・選手・役員用冷房車（大型バス４～５台）
・役員・補助員に帽子、保冷バック、水分を配布、日傘を準備
・各都道府県選手、役員・補助員の控えテントに扇風機
・役員・補助員の控え室に冷房室を設置
・入場口にミスト送風機設置
・熱中症アドバイザー取得推進
・水分補給や休憩の放送で呼びかけや巡視
・WBGT やヒートルールの運用

（４）コロナ感染症拡大防止対策

・無観客・人数制限（選手数、チーム関係者数、役員補助員の削減）
・開会式をなくし、開始式に変更した　（時間短縮、密を回避）
・手洗い用石鹸・消毒　（入場口、各控所、トイレ、コート入口）
・マスク着用、食事場所、密回避のための放送・巡視
・健康チェック（スマートフォンの活用）

4　来場の人数把握と健康チェック

（１）インターハイでの入場制限

無観客での開催とし、登録したもののみの入場とした。また、役員補助員数もできるだけ削減して運営した。

	出場選手	控え選手	監督 ベンチ入り指導者	引率教諭　兼 感染症対策責任者	コーチ トレーナー
団体戦	８名	２名まで	１名まで	１名まで ※監督等が兼ねてもよい	１名まで
個人戦	出場選手	出場１ペア以上２ペアまで→1名まで 出場３ペア以上４ペアまで→2名まで 出場５ペア以上６ペアまで→3名まで 出場７ペア以上８ペアまで→4名まで	最大４名 ただし、ペア数を超えてはならない	１名まで ※ベンチ入り指導者等が兼ねてもよい	１名まで

（２）入場人数の把握管理と健康チェックの提出

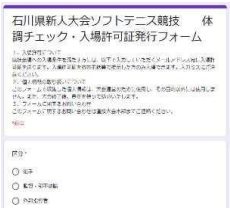
ソフトテニス競技では昨年度からスマートフォンを用いた健康チェックと入場許可証発行による人数把握を行ってきた。このインターハイでは I-O DATA にも協力をいただき、大人数でのデータ管理もできるように改善し石川県開催競技で活用した。

入場までの流れは、スマートフォンを用いて、①QR コードをよみ、②健康チェック・入場許可証発行フォームに登録する。すると③数秒後に入場許可証が発行される。発行された入場許可証画面を保持またはスクリーンショットし、入場時に提示する。

【発行までの流れ】

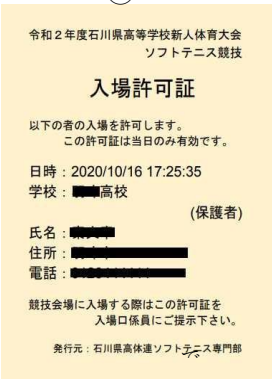
①

②



研修大会オリジナル QR

③



長所	改善内容	改善方法
データとして管理できる。	事前に登録する必要あり	申込書類等を利用
記載ミス等のチェックが不要	許可証が発行できなかった時の対応	登録時の間違い
入場時の時間削減	システムの管理が難しい	管理できる人を増やす
書類提出等ないのでコロナ対策になっている	スマホを利用できない人	書類で対応
日別カラーの入場許可証の発行	許可証発行までの手順の周知	申込時に手順を周知、事前に発行できるか確認する期間
QRコードですぐにアクセス可能	外字等の変更	事前に簡単な漢字へ変換

◎運営側の感想

・何か起こった時にスムーズに対応することが出来る。

・データ管理がしやすかった。

◎監督の方の感想

・QR コードを使用することでスムーズに登録することが出来た。

・良いアイディアだった。選手・監督ともにスムーズにチェックすることが出来た。不慣れな方にとっては難しかったかもしれないが、紙でのチェックも可能となっていたので、親切だった。日頃部活動中はスマホを制限しているので、利用のルール設定等で心配はあったが、進行表も随時掲載されるなど新しい便利な点もあった。

◎選手の感想

・短時間で登録することが出来た。

・特に戸惑うことがなく、チェックすることができた。

5　まとめ

コロナ感染拡大が心配される中でのインターハイ開催ではあったが、前記の熱中症予防対策、コロナ感染予防対策を徹底することで熱中症や怪我、コロナ陽性者なしで無事終えることが出来た。全国高体連ソフトテニス専門部部長からは、これまでのインターハイと比較しても、今年度は大きな事故もなくスムーズに運営が進んだとお言葉を頂いた。今後も大会運営や部活動の在り方など状況に応じて対応していくことが求められる。まだ先の見えない状況であるが、今回の取り組みを生かし安心・安全な環境つくりに努めていきたい。

石川県の高校バレー強化に向けて
～女子 U-16 大会の開催を通して～

バレーボール専門部
石川県立金沢商業高等学校　小坂　慎吾

１　U－16 大会を開催した背景

石川県のバレーボール人口についてはジュニアチームと高校生の登録チームが年々減り続けている。特に中学生に関しては学校により大きく差があるが、能登地区・加賀地区の生徒数は減少傾向にある。この競技人口が減り続けている中で競技力を上げるためには有望な生徒の発掘と確保、練習効率の向上、練習環境の向上（練習時間や場所の確保と経験の量）が大切であると考える。

平成 30 年頃に令和 3 年度に行われる全国高校総体バレーボール競技は地元石川県で行われることとなり、この年にターゲットエイジとなる高校 1 年生とその下の代の中学 3 年生や 2 年生がいち早く戦力となるように、また、経験不足とならないようにしたいと考え発足した。

石川県はジュニアの育成について熱心な指導者が多く、過去 10 年の中では全国第 3 位になるなどの成績も収めている。中学生男子では JOC カップで第 3 位に 3 回、全日本中学選手権大会で優勝 1 回、第 3 位 1 回など、優秀な成績を収めている。しかし、女子では全国に出場しておらず、北信越大会でベスト 4 に入るのが精一杯という結果である。

高校での過去 10 年の結果は、男子では全国高校総体ベスト 16・2 回、国民体育大会 3 位・1 回、全日本選手権大会ベスト 8・2 回、ベスト 16・2 回となっており、全国大会でも優秀な成績を収めている。

女子では、全国高校総体ベスト 8・2 回、ベスト 16・5 回、全日本選手権大会ベスト 16・1 回と男子ほどではないもののコンスタントに結果を残している。

男子は中学校の段階で成果を残しているものの、毎年、優秀な選手の県外への進学者がおり、中学から高校への進学時にどれだけ県内に残るかが課題となっている。

女子では県外の流出は少ないものの、中学校では全国大会に出場しておらず、競技力の向上と経験の不足が課題となっている。

そこで専門部として、男子は県内強豪校との交流、女子では基礎能力向上や競技力の向上を目的とした強化が必要と考えた。その対策として、女子では全国大会への出場経験など、試合経験の乏しさを補う取り組みが競技力向上になると考え、早い段階からの試合経験を通した U－16 大会の開催を計画した。

２　大会開催計画と実際の運営方法について

U－16 大会については、高校 1 年生を主体としたチームを構成し、県内外のチームと試合をすることで早期の技術向上に向けた大きな刺激になることを目指した。

内容は、1 年間で 4 回の県内予選及び県外チームを招いての予選を行い、予選の上位チーム及び獲得ポイントの多いチームで 12 月に決勝リーグ戦を行い、年間チャンピオンを決めることとした。これにより、目的である試合経験の確保と年間を通しての持続的な強化が行われると考えた。

初年度は、年間を通しての開催は不可能と考え、第 1 回のみ開催することとし、11 月の新人大会が終わった後に県外チームを招いての試合を行った。参加チームは県内の 10 チームと石川県 JOC、県外は全国優勝している金蘭会（大阪府）をはじめとして益田清風（岐阜県）、高岡商業（富山県）雄山（富山県）帝京大三（山梨県）、滋賀県 JOC であった。

参加規程は、高校 1 年生が主体となりキャプテンはこの中から決めること。人数不足の場合は早生まれの 2 年生、それでも不足の場合は数人の 2 年生の参加を認めることとした。

大会は、1 日目は各高校体育館を使用しての予選会。2 日目は予選上位 2 チーム、3．4 位チーム、5．6 位チ

ームに別れ順位別リーグ戦を実施した。試合の進行状況や点数などは、全チームがＬＩＮＥグループに登録し、各試合が終わり次第報告をして全チームが試合の運行状況と各会場の結果が分かるように工夫した。

令和元年度は金蘭会が優勝し、益田清風が準優勝、石川県ＪＯＣと小松商業が第３位という結果となった。各チームは１年生の大会出場機会はほとんど無く、いい経験ができたという感想や、生徒数の多いチームにとってはユニホームをなかなか着れない１・２年生にとってとても貴重な経験になったなど出場したチームには高評価だった。

続く令和２年度は予選グループ戦を含む年間を通して全５回の大会開催を予定していたが、残念ながら２月中旬からコロナウイルスの影響があり休校処置が行われ、春季大会や高校総体などの大会が中止となるなど開催を断念することとなり、しばらくは開催を延期することとした。長らくの休校期間と夏休み中の補習が落ち着き始めた９月に全日本選手権大会石川県予選が開催され、ようやく試合ができる環境ができ始めた。そこで、10 月末に３年生の県予選も終わり、来年の高校総体に向けたターゲットエイジの育成及び１・２年生の試合経験を積むことを目的とした U-16 大会の開催を検討した。第１回は、県外を招いての試合は行わず、県内のチームで集のみでの開催とし、10 月に行われる全日本選手権大会県予選終了後、コロナ感染対策を万全に行い大会を開催した。県内上位チームを中心に 11 チームが参加し、会場は３つの高校に分かれて試合を行った。試合経過は昨年同様にＬＩＮＥグループでの報告として、全チームが試合の状況をリアルタイムで共有できるようにした。結果は、優勝は金沢商業、準優勝は星稜、３位は小松大谷、鵬学園となった。

第２回大会は前年度と同様に 12 月に開催した。前回優勝の金蘭会は大阪での感染拡大が顕著になりつつある時期だったので出場は辞退となり、感染拡大地域と関東近辺の県には案内を出さず、石川県近辺とその範囲内で全国上位のチームを念頭に招待を行った。結果、京都橘（全国上位常連校）が出場することとなり、その他県外は高岡商業、仁愛女子が出場した。県内も９チームが参加することとなり。結果、優勝は京都橘、準優勝は仁愛、第３位は高岡商業と金沢商業となった。

３　大会参加チームの成績

令和元年度の第１回大会は試合後に始まった休校処置やしばらく大会や練習試合が行われなかったことにより考察からはずし、県内大会と第２回大会からの考察とする。

出場回数	参加校　対象１４校
２回参加	金沢商業、星稜、小松大谷、鵬学園、金沢桜丘、金沢
１回参加	輪島、金沢学院、七尾、小松明峰、金沢二水、遊学館、小松、金沢泉丘

令和３年度大会結果

春季大会

ベスト４	**金沢商業、星稜、金沢、金沢桜丘**
ベスト８	（輪島）、（小松商業）、**小松大谷、**（七尾）
ベスト 16	（金沢学院）、（金沢泉丘）、羽咋、（金沢二水）、（小松）、金沢龍谷、門前、金大付属

高校総体石川県予選

ベスト４	**金沢商業、星稜、金沢、金沢桜丘**
ベスト８	（小松商業）、**鵬学園**、（輪島）、（金沢学院）
ベスト 16	（小松）、（小松明峰）、北陸学院、羽咋、（遊学館）、金沢龍谷、金沢北陵、**小松大谷**

春高予選

ベスト４	**金沢商業**、**星稜**、**小松大谷**、（金沢学院）
ベスト８	（遊学館）、（小松商業）、**金沢桜丘**、**金沢**
ベスト 16	（輪島）、金沢伏見、（小松明峰）、明倫、金沢西、**鵬学園**、北陸学院

新人大会

ベスト４	**金沢商業、星稜、小松大谷、**（金沢学院）、
ベスト８	（輪島）、**金沢桜丘、**（小松明峰）、（小松）
ベスト16	小松市立、（遊学館）、**金沢**、鶴来、**鵬学園**、金沢龍谷、（金沢二水）、金大付属

※太文字がU－16大会２回参加チーム、（　）は１回参加チーム

４　考察

本年度の優勝、準優勝は変化なく、全日本選手権石川県大会から２チームが入れ替わった。ベスト８まではU-16大会出場チームが占めている。

U-16 大会に出場し上位の成績を収めたチームは、各種大会においても上位の成績を収める可能性が高いことが考察される。

U-16 大会に出場したチームには、チームを組める人数が確保できるという条件や、大会上位のチームの方が選手の出場機会を模索していることなど含め、早い時期での試合の経験を効果の高いことだと断言する事には至らなかったが、早期の経験と試合に出場する為に少しながらも主軸として練習した経験は少なからずとも効果があったのではないかと考える。

今回は予定していた大会も十分に行うことができず、競技力向上にどれだけ貢献できたのか、情報量が少なく正確に把握することはできなかったが、昨年度と本年度ように、十分な練習ができない、練習時間が確保できない環境、練習試合もままならず例年に比べてもあまりにも経験が少なくなって技術的にも競技力的にも成長機会が少なく、休校処置など不安を抱えながらも頑張っている生徒の状況を考えれば早い時期に試合を行える環境を少しでも作れたことは生徒の経験と技術力向上に大きな力となったのではないかと思える。また、出場に際して１年生の入部が少なかったチームは出場できなかった点、県外のチームを招待するにも同県での力関係やグループによって出場を辞退するチームやコロナの影響で心配を払拭できずに出場しなかったチームなど問題があり、今後の大会運営の検討課題としたい。また、本来ならすべての大会を開催して、結果の変化や大会運営のノウハウなどもう少し精査したものや、多くの情報や経験から今回の研究発表を行いたかったが、コロナの影響や休校処置のため中途半端な結果や情報量の少なさから、的を得ていない点も多分にあることをこの本文をもって予めご容赦願いたい。

５　今後の取り組みについて

今回の研究結果はまだまだ情報量としては少なく、結果としても考察するには曖昧な結果となっているが、経験に並ぶ学習と、早い段階での学習の経験は科学的に考えても効果の高いものと考える。今後もバレーボール専門部の強化事業として継続的に行っていくとともに、当初の予定として考えていた年間全５回の予選大会の開催を通して年間のチャンピオンを決定する大会を運営することを来年の課題として、全国のチームも参加したいと思えるような大会にしていくこと。また、今回は女子だけの開催となったが、男子大会も開催し、県外の流出を食い止める一環として早い時期に高校のチームと交流を持ち、郷土愛を育み、憧れや県内のチームが目標となれるような大会としたい。

各会場で散らばって行っていた試合をリアルタイムで一体感を持てるような大会にするために、ＬＩＮＥの活用や大会運営を円滑に進めるためのＺＯＯＭでの度重なる会議など、公式戦でなかなかできないことにも挑戦できたことは今回の収穫である。今後、県内の公式戦などにも今回の経験を活かし、大会の運営を円滑にするとともに、生徒の競技力向上に少しでも貢献していきたい。

地域で取り組む競技力向上

相撲専門部
石川県立飯田高等学校　濱田智啓

１．はじめに

石川県立飯田高等学校相撲部は地元中学校からの進学者のみが所属しているにも関わらず、近年は部員を維持するだけでなく、県内の有力校とともに石川県を代表する相撲部として成績を残している。その背景には、珠洲市、能登町の地域住民の方の協力や、近隣中学校との合同稽古による長期間の指導がある。今回は飯田高校相撲部における競技力向上の背景にある地域の方々との交流等について紹介していきたい。

（１）飯田高校の概要

石川県立飯田高等学校は能登半島の先端珠洲市にある石川県最北端の高校である。明治４５年に珠洲郡立実科高等女学校として開校し、今年度で創立１０９周年を迎えている。「真理を探究し、高い知性と豊かな心を養い、積極・進取の精神をもった明朗快活で実践力のある誠実な人間を育成する。」を教育目標とし、校訓は「清慎勤」である。

生徒数は３１６名で、約９７％が珠洲市と能登町から通学している。現在、１年生は普通科普通コース２クラス、普通科ビジネスコース１クラス、２年生は普通科普通コース３クラス、普通科ビジネスコース１クラス、３年生は普通科３クラス、総合学科１クラスである。奥能登地区の人口減少のあおりを受けて募集定員・生徒数が減少しており、今年度の３年生をもって平成２０年に開設された総合学科が無くなることが決定している。特色ある授業としては、総合の時間に「ゆめかな」と題して探究活動を行っており、各々が自ら課題を設定し学びの方法を選び取り、得た成果を表現している。

本校には１７の運動部と５つの文化部の合計２２の部活動があり、９９％の生徒がいずれかの部活動に加入して活動を行っている。特にウェイトリフティング部が顕著な成績を残しており、全国高校総体での団体優勝などの成績を残している。

（２）相撲部の活動状況

本校相撲部は創部９０年以上と聞き及んでおり、今年で１０５回目となった高校相撲金沢大会には８９回出場している。卒業生には元幕下の駿馬がいる。平成２１年４月から平成２４年３月までの３年間は部員がおらず休部状態であった。平成２４年４月に活動を再開した時から緑丘中学校相撲場において中学生と合同で稽古を行っている。高校進学の際に転住してくる生徒はおらず、全員が実家暮らしで部活動や勉学に励んでいる。

現在は５名（うち１名女子マネジャー）で活動しており、水曜日と日曜日を週休日としている。選手の出身中学校は珠洲市立緑丘中学校３名、能登町立小木中学校１名で、いずれも相撲経験がある。今年度は県総体団体３位、個人１００ｋｇ級優勝、同準優勝、全国総体個人１００ｋｇ級準優勝、県新人大会個人４位、同個人１００ｋｇ級優勝、準優勝という成績を残している。以下、平成２４年度以降の主な成績である。

年度	部員数	主な成績
平成２４	１ １年生１名	第５２回石川県高等学校相撲七尾大会　個人軽量級３位
平成２５	２ １年生１名 ２年生１名	第５３回石川県高等学校相撲七尾大会　個人軽量級３位
平成２６	５ １年生３名 ２年生１名	第５４回石川県高等学校相撲七尾大会　団体３位　個人軽量級３位 第９８回高等学校相撲金沢大会　個人３位 県総体　団体３位、全国高校相撲十和田大会出場

	３年生１名	県新人　個人軽量級３位
平成２７	４ １年生１名 ２年生３名 ※３年生は退部	第５４回石川県高等学校相撲七尾大会　個人軽量級３位 第９９回高等学校相撲金沢大会　個人ベスト１６ 県総体　個人ベスト８ 県新人　個人軽量級３位
平成２８	４ ２年生１名 ３年生３名	第５５回石川県高等学校相撲七尾大会　個人中量級２位、３位 同重量級３位 県新人　個人１００ｋｇ級３位
平成２９ 発表者着任	２ １年生１名 ３年生１名	入賞無し
平成３０	３ １年生２名 ２年生１名	Ⓐ県新人　個人８０ｋｇ級優勝　全国選抜大会出場
平成３１ 令和元	４ １年生１名 ２年生２名 ３年生１名	Ⓐ第５８回石川県高等学校相撲七尾大会　個人軽量級優勝 県総体　団体３位、全国高校相撲十和田大会出場 県新人　Ⓐ個人８０ｋｇ級優勝　Ⓑ個人１００ｋｇ級優勝 （全国選抜大会開催されず）
令和２	５ １年生２名 ２年生１名 ３年生２名	（七尾大会、総体は開催されず） Ⓑ県新人　個人１００ｋｇ級優勝 Ⓑ全国選抜大会　個人１００ｋｇ級ベスト１６
令和３	５ １年生２名 ２年生２名 ３年生１名	（七尾大会開催されず） 県総体　団体３位　Ⓑ個人１００ｋｇ級、Ⓒ準優勝優勝 Ⓑ全国総体　個人１００ｋｇ級準優勝 県新人　Ⓒ個人４位　個人１００ｋｇ級Ⓒ優勝、準優勝 （全国選抜出場権獲得）

２．地域で取り組む競技力向上　～地域とのかかわりとその成果～

本章においては、本校を取り巻く地域の環境を紹介し、近年、上記のような成績を残すまでの競技力向上にどのようにつながっているのかを分析する。

（１）近隣小中学校との稽古

本校相撲部は平成２４年以来、珠洲市立緑丘中学校と合同で稽古を行っている。これは平成２５年度以降の緑丘中学校からの進学（入部）者は中学生の時から高校生と稽古していることを意味している。その結果が平成２６年度から２８年度までの３年間で出ていることがわかる。一方で、平成２７年度入学の１名は緑丘中学校出身ではないことや平成２８年度に入部者がいなかったことから、中学生時代の稽古の質にそれまでの部員と差が生じ、本校相撲部として思うような成績が残せなかったと考えられる。令和元年度以降も平成２６年からの３年間と同様の状況に起因して成績の維持・向上が継続していると考えることができる。

珠洲市、能登町には８つの中学校があり、その内５つに相撲部がある。緑丘中学校以外の中学校とも行き来があり、中学生の大会の前には合同で稽古を行うこともある。市内小学校には３つの相撲教室があり、いずれ

とも週末を中心に合同で稽古を行うこともある。この活動形態は小中学生の競技力の向上にとどまらず、高校生が小中学生とともに稽古し指導する中で自身の相撲や稽古への向き合い方について考え、見直す姿が見られることもある。

（２）地域社会とのかかわり

珠洲市、能登町には相撲経験者が多く、卒業生や地域の方々が休日を中心に稽古場を訪れ、選手とともに汗を流して指導にあたってくださっている。卒業生の元幕下駿馬や珠洲市出身の元幕下宝龍山も、帰省した際には中高生に指導していただくこともあった。

また、発表者が本校に着任したのは平成２９年４月であるが、その数年前から今日までの間、緑丘中学校相撲部の指導者は同じ人物であり、一貫した指導を行うことが可能だったのではないかと考えられる。また、稽古場に出入りする地域の大人はその年代によって異なり、その時の部員の出身中学校の卒業生や少年相撲時代の指導者、保護者など様々である。多くの人から様々なことを学ぶ中で、個性ある部員が自身を高めていくことが可能だったのではないかと考えられる。

本校相撲部が地域に応援される存在としてあり続ける要因を考えたい。大きなものとしては、地域の方々の言う「自分らも昔そうしてもらったから」である。この言葉から、地元の子を地元の人で育てるという意識が伝統的に受け継がれていることがうかがえる。本校相撲部員も、自ら出身小学校の稽古に顔を出したり、珠洲市相撲連盟主催の相撲大会（小中学生）の運営補助に参加したりしている。これも「自分らも昔そうしてもらったから」、それが自然なのである。応援の襷を無意識のうちに次世代へつないでいってくれていることに頼もしさを感じる。

（３）本校相撲部がもたらした成果

さて、上記のような地域社会、近隣小中学校とのかかわりが本校相撲部へ与えている影響について考える。それは本校相撲部を「高校でも伸びる」集団にしたことにあると考えられる。上の表にⒶ、Ⓑ、Ⓒの３つの記号を付してあるが、これは同じ記号のものは同じ人物が残した成績であることを示している。これらの選手は実力をしっかりと維持・向上させていることが明らかである。地元出身者のみで専門的な指導員が常駐しているわけでもない高校においても、地域に育ててもらうことでこのような結果を残すことを可能にしている。

３．おわりに

今回は地域で取り組む競技力の向上の例として本校相撲部と地域とのかかわりを紹介した。何かしらの仕組みづくりを地域で行っているのではなく、地域社会の伝統があり、それに支えられて本校相撲部が存続し、部員の競技力が向上している。今後もこの伝統の中で部員を維持し中学校との合同稽古を継続することで、高校相撲で良い結果を残すことができる選手が増えるのではないか。一方で、緑丘中学校以外の出身者の成長という課題も残っていると考えられる。地理的な問題もあり、日常的に合同稽古を行うことは難しい。今後、珠洲市相撲連盟などとも協力して、地域をあげたアマチュア相撲の興隆に向けて何ができるか考えていかなければならないと改めて感じた。卒業生が大人になっても本校相撲部に関わり、伝統をつないでいってくれることを期待し、結びとしたい。

第１５回県研究大会参加者名簿

	役　　職	氏　名	所　属
1	石川県高等学校体育連盟会長	正村　泉一	金沢桜丘高等学校長
2	石川県高等学校体育連盟副会長	西野　正洋	寺井高等学校長
3	石川県高等学校体育連盟副会長(調査研究部長)	北川　博勝	鶴来高等学校長
4	石川県高等学校体育連盟副会長	大工　高志	穴水高等学校長
5	石川県高等学校体育連盟副会長	山下　一夫	金沢龍谷高等学校長
6	石川県教育委員会保健体育課長(高体連参与)	居村　吉記	
7	石川県高等学校体育連盟理事長	石川　貴之	金沢桜丘高等学校
8	石川県教育委員会保健体育課指導主事(指導助言者)	宮西　良岳	

	学　校　名	参加者氏名(下線：発表者、ゴシック:調査研究委員)			
1	大聖寺実	若林　伸之			
2	加賀聖城	高岡　理沙			
3	大聖寺	矢田　英	達　光洋		
4	加賀	本田　雅之			
5	小松商業	竹田佐太雄			
6	小松工業	小町　昴史	中谷　昌和	山上　茂信	
7	小松市立	木戸口　肇			
8	小松	山田　潤	角橋　茂則		
9	小松北	木村　圭佑			
10	小松明峰	川瀬　幸子			
11	寺井	小畠　敏和			
12	鶴来	山田　純丈	**糀　高晴**		
13	松任	鴨田　祐介	早川　由規		
14	翠星	根石　修			
15	野々市明倫	丹内　周子	川崎　克也		
16	金沢錦丘	**（発表者）新平智恵子**	小檜山保雄		
17	金沢泉丘	中村　建哉			
18	金沢二水	西川　大貴	荒川　富夫		
19	金沢中央	門間　昭彦			
20	金沢伏見	今川　徹			
21	金沢辰巳丘	吉田　亮介	田村　達		
22	金沢商業	**（発表者）小坂　慎吾**	金城　美咲		
23	県立工業	生田　佳澄			
24	金沢桜丘	**吉村　直哉**	**久保　洸旗**	横野祐太朗	**（発表者）松田　良平**
25	金市工業	北橋　純子	中野　克也	増田　英樹	
26	金沢西	**中村　兼希**			
27	金沢北陵	川井　孝人			
28	金沢向陽	**中川　義之**	**山首　一恵**		
29	内灘	片岡　信忠			
30	津幡	河村　聡	宮村　徹	**井谷　亜矢**	加藤　丈司
31	宝達	油野　知加			
32	羽咋	中越　早代			
33	羽松	倉脇　寛支			
34	羽咋工業	**文後　豪介**	松山御勇大		
35	志賀	稲田　浩平			
36	鹿西	向田　圭吾			
37	七尾東雲	岡田　英典			
38	七尾	安井　英司			
39	七尾城北	白藤　金一			
40	田鶴浜	折坂　和希			
41	穴水	中宮　達哉			
42	門前	羽部　康徳			
43	輪島	赤穂　真			
44	能登	岩村　律			
45	飯田	米澤　正子			
46	ろう学校	細川　芳範			
47	明和特支	髙橋　雄志			
48	いしかわ特支	西村　幸祐			
49	金大附特支	中村由美子			
50	小松特支	宮下　翼			
51	七尾特支	向田　伸平			
53	小松大谷	西田　祥平			
54	北陸学院	能谷　槙			
55	遊学館	吉田　昌史			
56	金沢	波佐間美樹	北井　鉄明		
57	金沢龍谷	川岸　哲也			
58	星稜	安達　裕子	西川　明大	村上　宜重	
59	金沢学院大附	中島　義春	**（発表者）徳田　哲雄**	横山　康博	
60	鵬学園	高柴　礼奈			
61	航空石川	田辺　和文	南　健介	竹中　晴宣	